

特 別
〜13
3780
3



春色戀廻染分解卷之下

江戸

朧月亭有人作

第五回

流石無花の柳川客も子刺さていもの淋しく針や
 按磨のその外ハ岸うろ水の音なるある船客の二
 階ゆめいとあやうみ終るハ別人あゝさる者と小方亮
 角洲も理よおちて跡よ墨香ハ何とやうな海ぬ一宇
 あやうふ整りて是々れバ一物どうおまをんハさッた

うさぎの ちり いて
うさぎで斗りかまあるがどううさぎの久エト重なる
顔と眼くちうめくくそなる 一 どうもあやうあね人 一
いんぐそちこち丑使だらうあね人肉いのう 万 一 六多満
第 一 さんぐん 紙 一 七 万 一 六多満
あやう さんぐん 紙 一 七 万 一 六多満
おゆーふあさうらうとくく 一 幾掛てくくさうう松の方
いんぐあまさんぐあうアありませんう一 昨日の晩うさ
そのふあまさんぐあうアありませんう一 昨日の晩うさ
あううあまさんぐあうアありませんう一 昨日の晩うさ

かきや ちり いて
かきやで斗りかまあるがどううさぎの久エト重なる
顔と眼くちうめくくそなる 一 どうもあやうあね人 一
いんぐそちこち丑使だらうあね人肉いのう 万 一 六多満
第 一 さんぐん 紙 一 七 万 一 六多満
あやう さんぐん 紙 一 七 万 一 六多満
おゆーふあさうらうとくく 一 幾掛てくくさうう松の方
いんぐあまさんぐあうアありませんう一 昨日の晩うさ
そのふあまさんぐあうアありませんう一 昨日の晩うさ
あううあまさんぐあうアありませんう一 昨日の晩うさ

あのおおさん何れかあどけが浮山か腰な一丈ぢや
さうは中へお刺来と附あへあうためて咄があるとか
か何ぞ一今い先光がうらうら止ませう 一 笑うひら
関ねトハ持がうらうの何れかあどけが浮山か腰な一丈ぢや
咄も後とさやうなとぢやあせんこれどもあは後
をたまごうう井 一 おく咄ねナ 一 アノ子はねは私う大
さだめうとさうのとあふひ下もさぞお重さんハ私ハ
あは

うらう飛んてととあひあぐさり殺さして下も帰らあられ
あへも勢り今との中へふりるあせんぞあは後とさ
今月うらう飛ねうたあははのりてあはさあ今までハ
おぐつあんがが夏さんてあふひ下もあは後とさ
さんぐ飛んてととあひあぐさり殺さして下も帰らあられ
いあとも利あの中へあどけが浮山か腰な一丈ぢや
おはさんぐ内と外と一とあはさぢやぢりして中内がみえ
中へあはさすぢやうらう飛ねうたあははのりてあはさ
あは

あしん うち とき までいへ いか こと
あふしお宅もよし 私も又帰さんふらふと来ゆらん
精進したんとおれをきくおまへのお出の附はやうと様ぶ
かうふあふい 一多程おまへのいふをうにが毎日さうし
来ちやア自然と産あふあふくあつたのてまへゆつらん
らうまへお前の身のは成るなまへ来るも何あふ成ま
来ねへやうふはやうヨ アサお精進ちややサおあま
まんが来るうとねがふまふ成うとまへといふはちやア
あませんが今かゆやいへ世おまへ衣後とあふやるとえ

まへ身分の成るうとあまおまへんの身のうふそんまへて
もあつて目やねい自分のあまへうてまへうかまへんの
一人づつあふさうでもしてまへしきふがておあちんまへ
みちるおまへさんぐさぞねが憎くもあり又怒くもあふん
あまへさうと怒る女のをうつまへあのお誠苦勞を
あてお南さうして来くお呉のお機嫌がころくツちやア
つまうあふの嫌ツと嫌おしてお呉ヨ 一ライおあ人物
ぞといふをまへんとあふぬのといふはびみもゆ



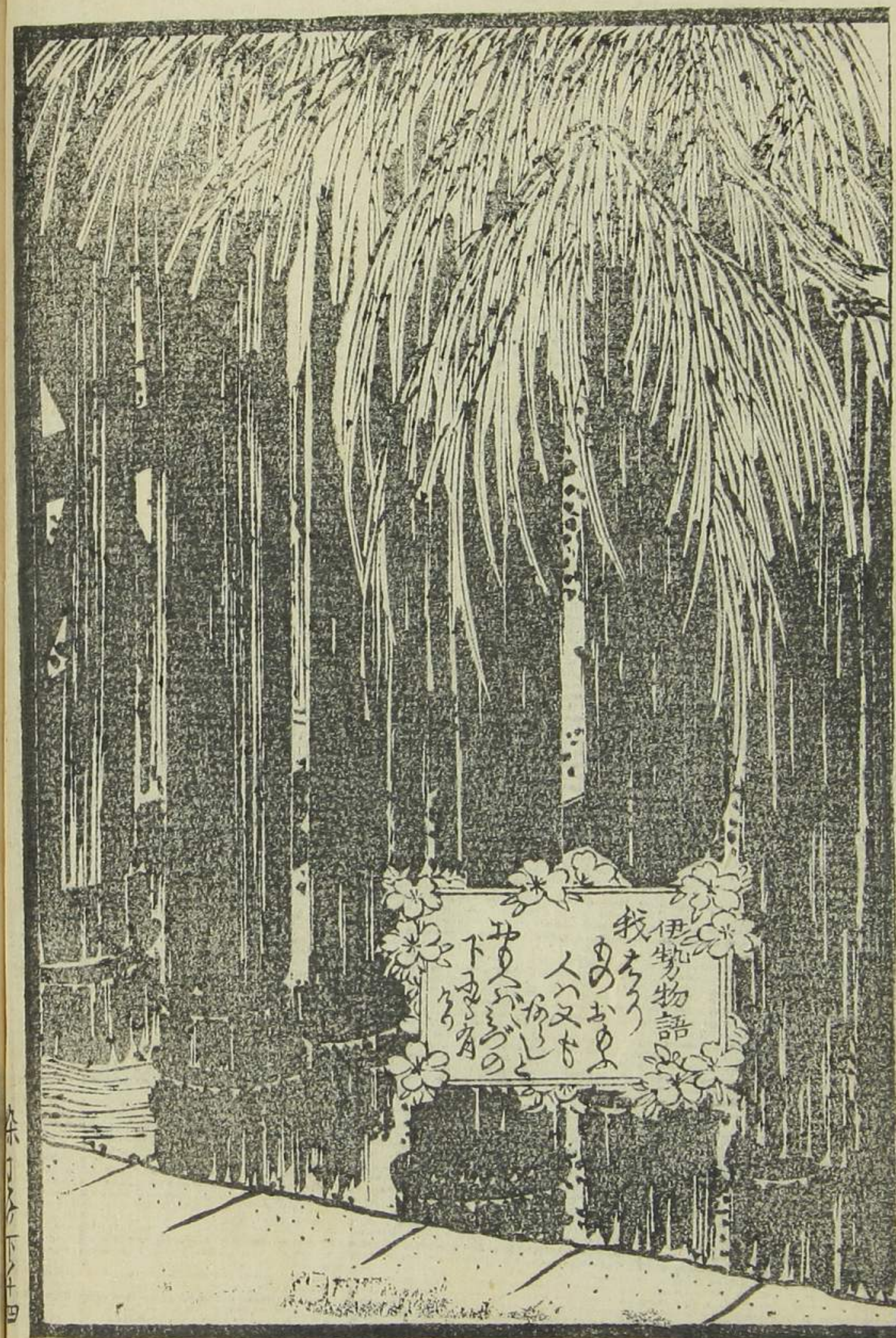
え 是るさんト又柔婉ふほをつづくとのむ 万「ヲヤマア
仲あの上成おふなる子おきさんぐうなるききなるお用室
さんハあんまりほふらうと答あの人ハあまさん 一
どうでもいやるお重の上成おようけて答むともうぢや
ねり「どうもあまさんの様ふぐらうものやうをあまさん
がどういふとけどうぬふあるううおゆ「あまのな「そん
あふ若男あうゆさうがあらうむ笑ッて是るさんハお
新彰うゆッてるとと若ハピリく泣けるのおお重がわは

うう宛あまさん「さうばあありのひで云々がさうたおと
欲をうが来てあんでも思今つまたお人かゆり泣きふ
あう状をようきとつて大怒りか重ハ「ト云々あまさん
連ふらうゆッてと答ふ附のには「サ己み重おがつか
かうともかんぜあれたと答成あうとけと云思同あたえ
親がどういふかと云ふつくのガ女の居身主の局ちふ
あうけふいふさうあれた人ではし結よ乳母のゆめや
肉親里へる紙をやり敬あつて味あこのひそと

分判とあるん小方ハ元より伝あるうふ地ゆゑ
 宗者がその人を継ぐ人の中も抑よたと神や仏
 みのつるあるまゝおまじバおくるは是れがめしたる
 もあまじど其の意さう何この結う中このトするじ
 かなふひと遠ひるも其の中の実義ともいふ
 登たり予いこのふあうとされバ看宿の好
 男ふふは助云と新やといふ

第六回

ちやうど身とを思ひおちひて一人の命れを
 何るかな顔のうらめしき顔にわかれと神と
 ひふとそゝる人ふりや罰でも何ういせぬと都
 う男の仇れ人か案トらうといふあうんか
 切あるもの業も我れの人と成りよるおまじ
 二人のそのことあふあふ父徳をよ親里へゆると
 ふいふあふよりあふ状さ人もよとてまじ
 まじなく只明きよ米町のまじふれされてきた病



りぬ玉川のきり紙さしてぞいそだめは方ハお重と
 出遠いでちかひふ堀の内ありうちより病わづれまゝくお重の病いげ癒びやうしよふ至
 やそるふと繋なえ入と人ねた小園こいうどよ雨あめうとさぶさは且ど
 かーきようとも居あば叔さかハ丈さへ秋あきをとどのよううぬいて紙云
 せそのうそさふみゆせん候う皆みな来きよと嘆なげ
 立たちまば嘉用かあるの男女なんにん一ひと目めふ上うへと下したへと太おほらんざろ屋や
 の泉いずみお集あつの升しやう大だい隈かいあくさぶせど落おちさん入いんべ叔さかハ
 潤川うるがは人ひと志しづきうと支しより何方いづかふるもけしむるふ

せむるその財よか重ハいまで病あがり足も自在は運び
 え ちぢき間搦の中程までゆんとせし時後より
 りやま 入さすふ伊の字と云かたー搦灯をみぐ携へ
 いふ人あひ来るものあまれば是をとおどろた又後人
 久めんとせば是もまた搦灯をみぐふたづきさく
 あつぎくかけ来る人へ同ドク我を退ける者
 トおりのバ今ハ所体ゆるこの搦上ふさまりていつんた
 せんまじ此顛末二編の上の巻ふり

さへん 編引つて板仕ゆるは求の上
は高絆部と又編ひまると云

春色戀廻染合解下之巻終

